

豊明希望チャペル礼拝

2026/6/21

「泣かなくてもよい」

ルカの福音書 7：11～17

今日の箇所は、若い息子が死んだ、やもめの母の葬儀の列、葬列に、イエス様の弟子達が出会った箇所です。

宗教改革者ルターは、今日の箇所は、牧師が、何度でも語られるべきところで、なんなら、毎週語ってもいいところだと、語ったともいわれています。

しかし、牧師である私にとって、もっとも語るのが厳しい、苦しい箇所でもあります。

というのは、ここで、語られている状況は、ルターも言うとおりに、人生の中で考え得る限り、もっとも、絶望的でつらい出来事だと言います、それゆえに、ここを語ることで、神の力、ひいては神が人に、どこまで出来るのか、永遠の命まで出来る、与えることができる、その、神の力と、救いをもっても象徴的に、典型的に教える事が出来るところだからと言うことのようにです。

私は、交通事故で、高校生の時、亡くなった教会員の息子さんの葬儀をしました。自死であった息子さんの葬儀をしました。同じく自死であった娘さんの葬儀をしました。今でも、それは、牧師にとって、致命的とも言える苦しい出来事だと思っています。致命的と言ったのは・・・

教会員の息子さんが交通事故で亡くなったのは、バイクの事故でした。まだ私が若い頃でした。今だからこそお話しできるということがありますが、今日の葬列の箇所ではありませんが、私は、この時、前夜式、葬儀、火葬と続く牧師の役目を果たすことは、私にとって、母親と兄弟たちを前に、どう声をかけていいのか・・・戸惑い、混乱、また逃げたいような思いにありました。

それは火葬の時だったと思います。この一家を導かれた宣教師が葬儀に参加されておりました。彼は、私にこう言われました。先生、もう少し、母親に寄り添っててくださいと。宣教師は、ずっと彼女の隣に寄り添っておられました。それは、私への叱責だったと思います。あなたは牧師として、もっと寄り添いなさいと。

仏教では、特に葬儀や仏教儀礼に関して、僧侶のことを、導師(導く師)と呼ぶことがあります。ですから、葬儀社の人は、葬儀を終えて、お棺が家を出るとき、牧師に、それでは、牧師先生、霊柩車まで、前に進んでくださいと言うことがあります。葬儀に関する神学校の授業では、牧師は、火葬場で、遺体を火葬にするとき、一番前にいて、牧師が責任を持って、お棺を火葬の窯(かま)に送るようと、書いてあることがあります。それは、よくわかっています。

ただ、これは、いいわけではないのですが、私は、先に挙げた、特にこうした、言語を絶するような事態の中で、実に情けない限りで、職場放棄と言われてもしか

たないのですが、私が、前になど進んでいけない、導くことは出来ない、今でも思うのです。この年になると、他の牧師から、先生、この場合、先生の経験ではどうしたのでしょうか、どうしたらいいですかと尋ねられることもあります。しかし、やはり答えはありません。しかし、だからこそ、同時に、この時、誰よりも(たとい私が葬列の一番前にいたとしても・・・)前にいて、葬列を導かれるのは、イエス様だと思っているということです。私ではない、いや私には出来ない、イエス様でしかできない、そして、イエス様は、それをしてくださるという事であります。

私の目には、葬列の先頭には、いつもイエス様がおられるように思っているのです。

たしかにルターはこう言いました。人は誰も死ぬ。必ず死ぬ。だから、人はいわば、死に向かって歩んでいるのだ。しかし、そんな私たちから逃げないで、そんな人生を歩まざるをえない私たちの前にいつも主はいてくださる。いえ、前にも、後ろにも、このお方を私たちは見ることが出来るのであると。私たちといっしょに死への道を、いっしょに歩んでくださるのだと。

逃げないで、私たちの人生で、一番つらいときにいて下さるのは、いつも、誰



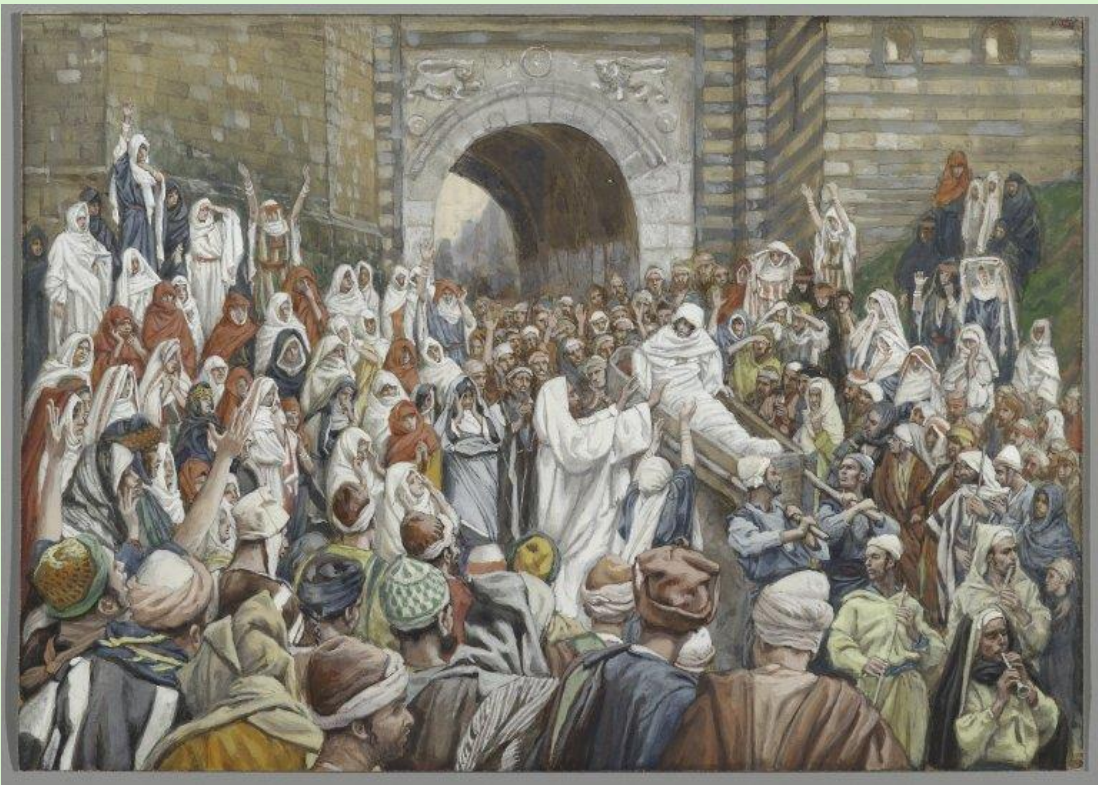
にとっても、イエス様だと。

今日の箇所は、そういうわけで、つらいところですが、同時に、どんなつらいときにも、イエス様が伴い、そして、私たちの力を超えた、限界を超えた、永遠の命を与えるという解決を与えて下さる方であることを確認してまいりたいと思います。

さて、前回の、百人隊長のしもべの病が癒された後、イエス様と弟子達は、ガリラヤ地方を南下して、この地図にあるように、30キロほどでしょうか、移動して、ナインという町に近づいておりました。聖書箇所を読みます。

「7:11 それから間もなく、イエスはナインという町に行かれた。弟子たちと大勢の群衆も一緒に行った。7:12 イエスが町の門に近づかれると、見よ、ある母親の一人息子が、死んで担ぎ出される場所であった。その母親はやもめで、その町の人々が、彼女に付き添っていた。」

さきほどの話しではありませんが、当時は、喪主である人、この場合、母親が、この葬列の一番前に出たようでもあります。ナインの地は城壁に囲まれた高台にあって、城壁の門を出ると下っていて(←絵)、埋葬場所まで、葬列が続きます。この小さな町には、城壁には、一つの門しかなかったと言われます。



ですから、この葬列と、イエス様の弟子達の群がはち合わせのかつこうになりました。前回は、百人隊長のしもべの癒やしで、この百人隊長は、ユダヤ人からも慕われていたようで、この出来事は、ずいぶんとイエス様と、弟子達にとって、鼻高々の出来事になったのではないかと思います。イエス様ってすごいぞと。

きっと彼らの顔は輝いていました。神さますごい、イエス様すごい、私たちはその弟子だ！と。笑い声や、賛美の声も聞こえたかも知れません。

ここを解説する人々は、まさに、悲しみの葬列と、喜びと賛美の行軍、あるいは行進のはち合わせだと言います。さてどちらが勝つのか・勝つというのは変な言い方ではありますが、この場合、このような場合、喜びの群は、いったん、静かにするでしょう、喜びすぎないように、顔を下にむけるでしょう。それがマナーであり、それが当然です。それ以外の方法は一切ありません。息子が死んだその葬列に、どんな喜びも勝てはしないのです。

この息子は、14 節で、イエス様がこの人をよみがえらせるとき、イエス様は、「若者よ」と言われておりますので、10 代であったか、20 代であったか。

また、この母親は、やもめであったと、あえてルカが追加で説明するとき、また、ルカが、この若者が、その彼女のひとり息子であったとも説明を加えているとき、彼の死が、どれほど、この母親にとって悲しく絶望的であるかを、私たちに想像させます、いや、想像しなさいと言っているようです。

きっと何かの事情で父親は先に亡くなり、このひとり息子だけが、母親の希望であり、単に希望というだけでなく、これから、この女が生きていく上で、唯一の頼りでした。また、回りの者は、その時は慰めても、それにしても、こんな不幸がおとずれたのは、何か、この家に、この母に問題があったのではないかと考えるものです。そういう噂が広まるものです。読者よ、そういう状況を悟れと、ルカは言っているように思います。

そして、ルカは、イエス様が、考え得る限り、人の人生にとって、これ以上ないと思われるような、もっともつらく、絶望的な時に、イエス様は、どうされるかということを見なさいと言っているように見えます。後半部分を読みます。

「7:13 主はその母親を見て深くあわれみ、「泣かなくてもよい」と言われた。7:14 そして近寄って棺に触れられると、担いでいた人たちは立ち止まった。イエスは言われた。「若者よ、あなたに言う。起きなさい。」7:15 すると、その死人が起き上がって、ものを言い始めた。イエスは彼を母親に返された。」

まず「深くあわれみ」とあります。このイエス様が、あるいは、神が人を「あわれまれた」という報告は、少なくともその言い方は、マタイの福音書とヨハネの福音書にはなく、マルコの福音書で2箇所と、ルカの福音書で、ここを含めて、5箇所あるのみです。

「1:58 近所の人々や親族は、主がエリサベツに大きなあわれみをおかけになったと聞いて、彼女とともに喜んだ。」

「1:78 これはわれらの神の深いあわれみによる。そのあわれみにより、日の出がいと高き所からわれらを訪れ」

「6:36 あなたがたの天の父があわれみ深いように・・・」などです。

ルカの強調点です。あえて、強調すれば、神はあわれみ、イエス様は「あわれみ深い」ということです。あわれみ、その意味は、同情するということであり、気持ちに寄り添うと言うことです。イエス様は、もっとも深く、私たちの痛みや苦し

み、悲しみに寄り添って下さる方だと。

ルカは、神は、イエス様は、そういうお方だと、特に、ここでは、ルカの福音書にしかない、この記事をおそらく詳しく取材して、この記事を書くことも、このルカの福音書を書く、一つの理由であったでしょうけれど、繰り返しますが、ルカは、ここで、**主は、私たちの悲しみ、苦しみ、絶望に、同情し、寄り添うことが出来るお方である事を忘れてはならない**と、強調するのです。

また、寄り添うと共に、こう言われたことを、ルカはまた強調します。それは、「**泣かなくてもよい**」と言われたことです。命令形で語られているので、口語訳では、「**7:13 主はこの婦人を見て深い同情を寄せられ、「泣かないでいなさい」と言われた。**」と、より強い命令形で語られます。

ただ、「泣くな」ではなくて、「泣いたままではいけない」と、泣いてもいいが、いつまでも泣き続けてはならないことを命じておられるように読めます。

人生の中で、泣くことはさげられません。クリスチャンであっても。この世に生きている限りは。しかし、イエス様は、また、神さまが、必ず、涙を拭い取って下さる方であることを信じるようにと、命じられたように読めます。

そして、最初に少し触れたように、このような、どう考えても、人生で一番苦しく悲しいと思われるような事態にあっても、神は、イエス様は、その悲しみの最中(さなか)で寄り添い、悲しみ続ける事がないように、その悲しみを喜びに必ず変えて下さると言うことです。牧師や、兄弟姉妹は、寄り添うことは出来ますが、積極的に、その悲しみを喜びに、感謝へ変えさせる力はありません。しかし、神には出来ますと、ルカは私たちに伝えているのです。

これは、言うまでもなく、十字架の死の贖い、そして、それを通して、永遠の命の約束、神の子どもとさせていただきますことの約束であります。

私たちは、たとい、この世で癒やしの奇跡をいただいたとしても、それは一時のことであり、最後には、誰もが癒されずに死ぬ定めにある事を知っています。癒やしの奇跡は、神が、確かに生きていて下さり、力を今でも、直接に及ぼして下さることの印であったとしても、癒やしは、最終的な解決ではありません。

しかし、神さまには、イエス様には、癒やしの向こうに、最終的な解決を持っておられると言うことです。

ここで、この息子が癒されたことは、母の為でした。そして、同時に、当時の、すべての、創られた者の、エデンを出された者のためでした。

「7:16 人々はみな恐れをいだき、「大預言者がわたしたちの間に現れた」、また、「神はその民を顧みてくださった」と言って、神をほめたたえた。7:17 イエスについてのこの話は、ユダヤ全土およびその附近のいたる所にひろまった。」

さて、この事は、多くの人々の知るところになりました。今朝、彼らと共に、私たちも知るので。すなわち、神がその民に、解決は、イエス・キリストにあること。人生の最終解決が、すべて、このイエス・キリストに委ねられていること、委ねていいこと、委ねるならば、すべての人々が、癒やしの先の永遠の命、神の子どもの特権が与えられることを、ここで、イエス様は、証明されたという事をであります。

今週の歩み。泣きたいことも多々あるかもしれません。その時、イエス様が、そこで寄り添っていて下さることを思い出したいと思います。そして、泣かなくてよいという力強い主の言葉をいつもいただきながら、泣いても、きっと笑って、バンザイと神を讃美しながら、ここから出て行きたいと思います。